

第3節 学校外の学習機会

1. 学習塾と予備校

【学習塾と予備校に通っている者は15.0%と少数派である。第1回調査の12.7%からわずかではあるが増加をみた。通塾日数は、週2日が約半数。通っている塾・予備校の種類は、「学校の勉強がわかるようになるための補習塾」が35.8%、「大学や短期大学を受験するための進学塾」が46.8%、「その他」1割である。第1回調査と比較すると、補習塾が44.5%から35.8%へと1割弱減少した。】(図1-25、表1-4、図1-26、図1-27)

Q5

あなたは今、放課後や日曜日に、学習塾や予備校へ行っていますか。(そろばん、習字などの塾は除きます。「公文」のような自習教室は含めます)

SQ1. [行っている人にうかがいます] 週に何日行っていますか。

SQ2. [行っている人にうかがいます] あなたの行っているのは、どんな学習塾(予備校)ですか。もっとも近い番号1つに○をつけてください。

当然のことながら青少年の学習機関は学校

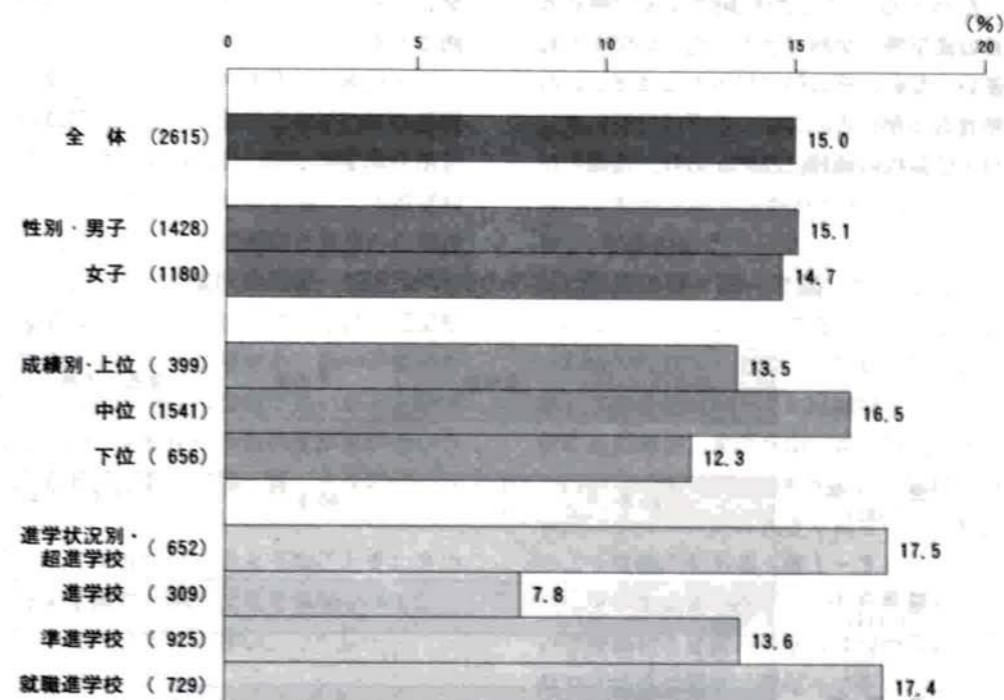
だけに限られるわけではない。ここでは、学校以外の学習機関の利用状況を明らかにするために、学習塾、予備校、通信教育、家庭学習教材、家庭教師などの利用度を尋ねてみた。

まず、放課後や日曜日の学習塾、予備校の利用状況である。全体的には「通っている」者は15.0%と少数派である(図1-25)。ただし、第1回調査の12.7%からわずかではあるが増加をみた。通塾率の低さは、第3章でみるように高校生の特徴の1つで、中学生、小学生の通塾率を大きく下回っている。すでに述べたように、家庭での学習の内容も高校生の場合、学校の宿題、予習、復習などに限定されており、それだけ高校生の学習に占める学校のウエイトは大きいといえる。学校外学習機関への依存度が小さいのである。

属性別にみると(図1-25)、成績の自己評価中位者、超進学校と就職進学校の在学者で通塾率が高く、また成績自己評価上位者と下位者、進学校在学者で相対的に低い傾向がある。

通塾者に対して通塾の週当たり日数を尋ねてみると(表1-4)、「2日」が48.8%と半数を占め、「1日」(26.1%)、「3日」(10.0%)が続く。4日以上通塾者は少数である。

図1-25 学習塾・予備校への通塾率



注) () 内はサンプル数。

表1-4 通塾の日数(高校の進学状況別、成績の自己評価別、通塾者のみ)

	全体 (391)	高校の進学状況別				成績の自己評価別		
		超進学校 (114)	進学校 (24)	準進学校 (126)	就職進学校 (127)	上位 (54)	中位 (254)	下位 (81)
1日	26.1	34.2	16.7	25.4	21.3	22.2	26.0	27.2
2日	48.8	41.2	66.7	42.1	59.1	44.4	51.2	45.7
3日	10.0	9.6	4.2	13.5	7.9	7.4	11.0	8.6
4日	5.1	4.4	12.5	5.6	3.9	5.6	4.7	6.2
5日	1.0	0.9	0.0	1.6	0.8	1.9	0.4	2.5
6日	0.5	0.9	0.0	0.8	0.0	0.0	0.4	1.2
毎日	1.3	2.6	0.0	0.0	1.6	9.3	0.0	0.0
無答・不明	7.2	6.1	0.0	11.1	5.5	9.3	6.3	8.6

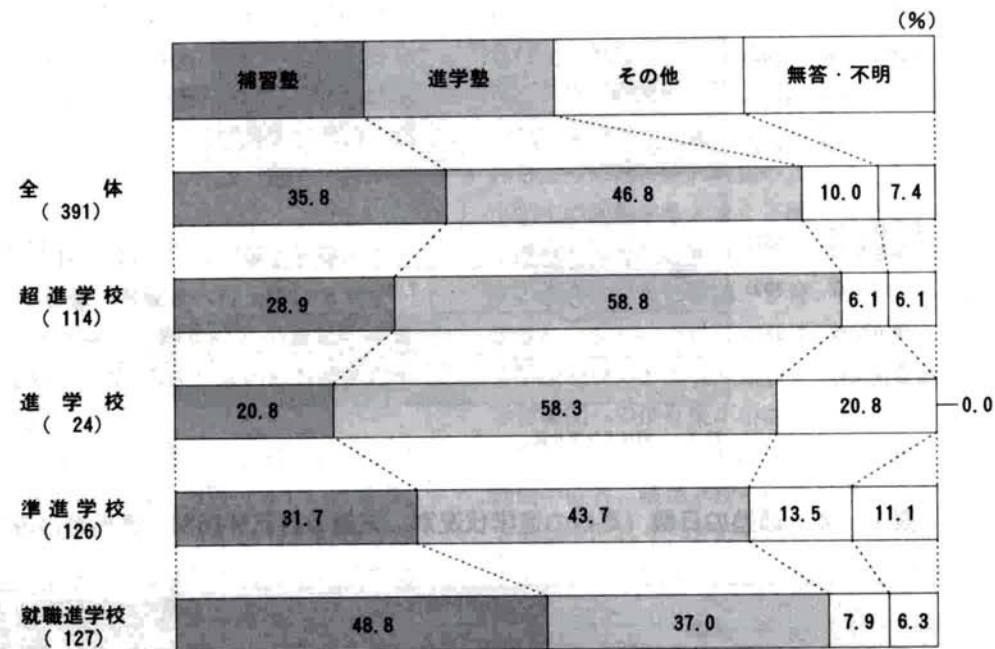
注) () 内はサンプル数。

同じく通塾者に対して通っている学習塾、予備校の種類を尋ねてみると(図1-26)、「学校の勉強がわかるようになるための補習塾」が35.8%、「大学や短期大学を受験するための進学塾」が46.8%と、進学塾が1割程度多い。なお、その他(具体的には不明)の通塾者も1割いる。高校の進学状況別によって塾・予備校の種類には差があり、超進学校

と進学校で進学塾が6割を占め、逆に、就職進学校で補習塾が5割に達している。進学校の回答にはその他が2割あってやや特徴的だが、今回の調査データからだけでは詳細は不明である。

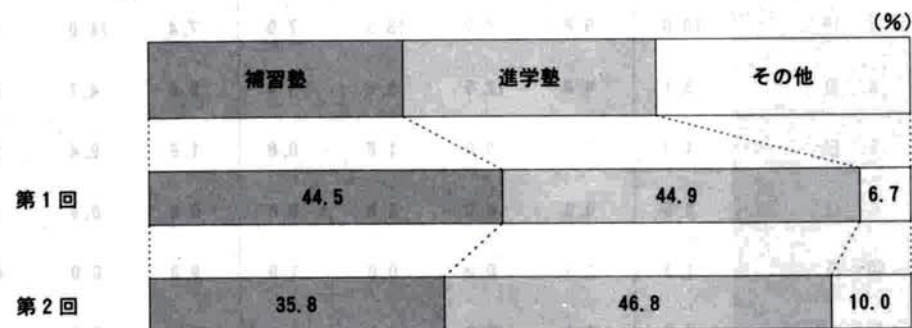
第1回調査と比較すると(図1-27)、補習塾が44.5%から35.8%へと1割弱減少し、その分進学塾とその他が増加した。

図1-26 塾の種類(高校の進学状況別、通塾者対象)



注) () 内はサンプル数。

図1-27 塾の種類(第1回との比較、通塾者対象)



注) () 内はサンプル数。

2. 通信教育、家庭学習教材と学校補習

【「今年の夏休みに、学校が行う補習授業を受ける予定だ」が49.1%と圧倒的に多く、これに「学校で朝や放課後の補習授業を受けている」が26.3%で次ぐ。他の学習機会の利用者は相対的に少数である。高校の進学状況によって非常に大きく異なり、①進学校では、朝や放課後の学校補習と夏休みの学校補習への参加率が高く、総じて、学習の学校への依存度が高い、②超進学校では、通信教育受講率が高く、また夏休みに塾や予備校の夏期講習に行く予定の生徒が多いなど、相対的に学校外学習機会への依存度が高いという特徴がある。】(図1-28、表1-5)

Q6

あなたは次のようなことをしていますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

通信教育、家庭教師、塾や予備校の夏期講習、宅配の家庭学習教材や学校の補習授業についてはどうだろうか。学校の補習授業は、学校が行う指導であるという意味では学校外の学習機会には含まれないが、学校による正規の教育課程ではないこと、さらに通信教育等の学校外学習機会とトレード・オフ関係があると推測されるため、ここでは比較分析を行った。なお補習授業については、①朝や放課後、②夏休みの補習に分けて尋ねた。

全体としてみると(図1-28)、「今年の夏休みに、学校が行う補習授業を受ける予定だ」が49.1%と圧倒的に多く、これに「学校

で朝や放課後の補習授業を受けている」が26.3%で次ぐ。他の学習機会の利用者は相対的に少数である(「進研ゼミ」のような通信教育を受けている)15.0%、「今年の夏休みに、塾や予備校の夏期講習に行く予定だ」10.8%、「宅配の家庭学習教材をとっている」3.5%、「家庭教師についている」2.6%)。これらは高校生の学習が学校中心であることを、物語っている。第1回調査と比較すると、大きな変化はないものの、学校夏期補習、宅配教材、通信教育がわずかに減少し、塾や予備校の夏期講習、家庭教師が若干増加している。

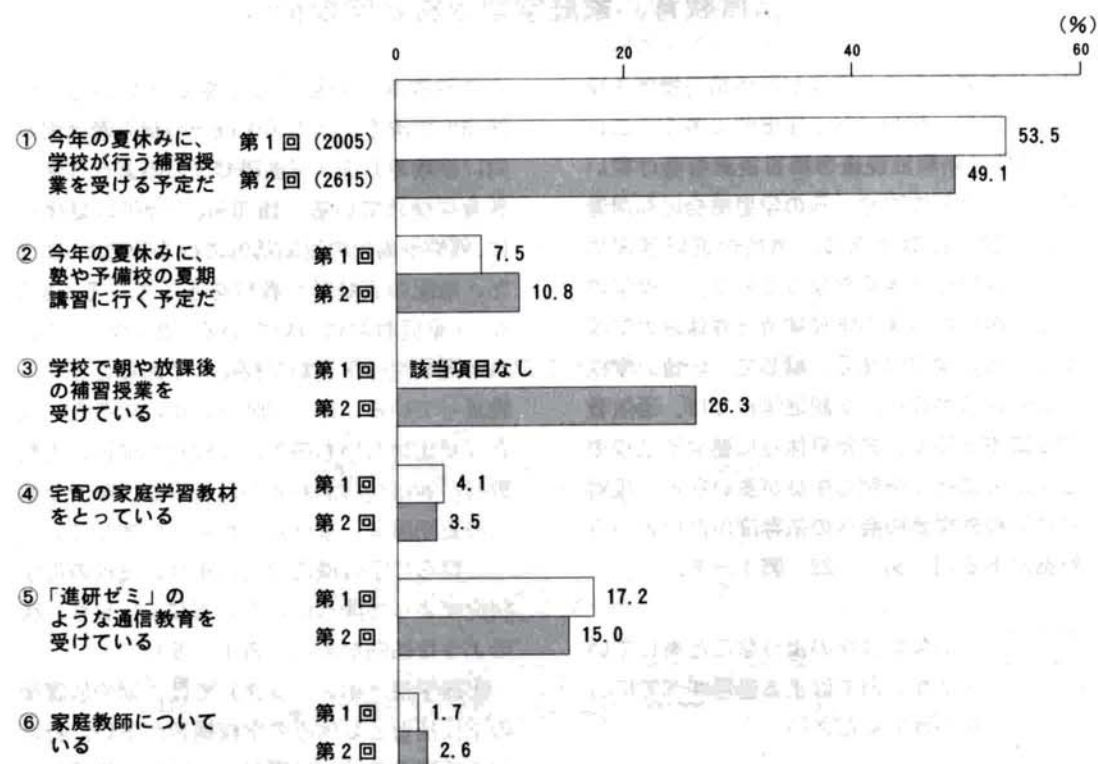
これらの学習機会の利用率は、高校の進学状況によって非常に大きく異なり、次のような傾向がある(表1-5)。

①進学校(第2ランク)では、朝や放課後の学校補習と夏休みの学校補習が多い。特に朝や放課後の補習は際だって多い。学校による補習授業の実施率自体が高いことの反映だろう。総じて、学習の学校への依存度が高いのが進学校の特徴である。

②超進学校では、通信教育受講率が高く、また夏休みに塾や予備校の夏期講習に行く予定という生徒が多い。夏休みの学校補習への参加予定率も高いものの、相対的に学校外学習機会への依存度が高い。

③準進学校、就職進学校では、概して表に掲げた学習機会の利用率がそう高くないが、就職進学校における朝や放課後の補習への参加率は高い。

図1-28 諸学習機会の利用（第1回との比較）



注) () 内はサンプル数。

表1-5 諸学習機会の利用（属性別）

(%)

	全体 (2615)	性別		成績の自己評価別			高校の進学状況別			
		男子 (1428)	女子 (1180)	上位 (399)	中位 (1541)	下位 (656)	超進学校 (652)	進学校 (309)	準進学校 (925)	就職進学校 (729)
家庭教師についている	2.6	2.7	2.6	1.5	1.9	5.0	3.8	1.9	2.6	1.9
「進研ゼミ」のような通信教育を受けている	15.0	16.7	13.1	19.0	16.4	9.6	22.4	17.8	13.4	9.3
宅配の家庭学習教材をとっている	3.5	4.2	2.7	4.0	3.3	3.8	5.5	2.6	3.0	2.7
学校で朝や放課後の補習授業を受けている	26.3	20.7	33.1	41.6	25.8	18.3	1.5	50.8	27.0	37.2
今年の夏休みに、塾や予備校の夏期講習に行く予定だ	10.8	11.0	10.4	12.3	11.6	8.2	15.3	4.5	13.1	6.6
今年の夏休みに、学校が行う補習授業を受ける予定だ	49.1	48.0	50.5	65.2	49.1	39.5	54.8	69.9	41.9	44.3

注) () 内はサンプル数。